

第Ⅷ因子抑制物質発生血友病A患者の頭蓋内出血に対する 非活性型及び活性型第Ⅸ因子製剤の止血効果

奈良県立医科大学 小児科 福井 弘
高橋 幸博
藤村 吉洋
三上 貞昭

第Ⅷ因子抑制物質を有する血友病Aの出血に対し、近年、抑制物質作用をバイパスする意味で第Ⅸ因子濃縮剤が有効であることが認められている。我々は、昨年第29回輸血学会で活性型第Ⅸ因子製剤であるFEIBAを使用し、抑制物質の発生した血友病A患者の硬膜下血腫を止血救命しえたことを報告した。その後、同一患者が1年間に3回にわたり硬膜下血腫を反復し、2回は活性型製剤のAutoplexにより、1回は非活性型製剤のProplexを各々使用したので、その臨床経過及び止血効果について報告する。

症 例

18歳男児、2歳時当科で第Ⅷ因子活性1%以下の重症血友病Aと診断、昭和55年9月6日右後頭部硬膜下血腫をきたした際、抑制物質を検出(71 Bethesda units)、FEIBAにより止血した。昭和56年8月、10月、11月と3回にわたり硬膜下血腫を呈した。

止血モニター

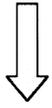
NA-PTT, PT, TT, Fibrinogen, AT-Ⅲ, FDP及びTEGによった。

臨床経過及び成績

①昭和56年8月29日、左前頭-側頭部にかけ硬膜下血腫及びクモ膜下出血、初期、非活性型第Ⅸ因子製剤Konyne (Cutter)を使用するも十分な効果を認めなかったため、Autoplex 2400U (50U/kg)/日、次いで4560u (100u/kg) 4日間連日注入し、臨床的改善を認めた。②10月7日左右頭部の硬膜下血腫を認めKonyne使用后も意識レベルの低下、けいれん発作出現しAutoplex 4560u (100U/kg) 4日間連日投与により止血。③11月15日右前頭-側頭部硬膜下血腫に際し非活性型第Ⅸ因子剤Proplex 10 vials/日 5日間投与した。上記の出血発作時のNA-PTT及びTEGr値はAutoplex及びProplex注入後2時間で最大短縮を認め、その後漸時、延長した。又副反応及びDICを思わせる所見は認めなかった。

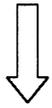
考 案

抑制物質の発生した血友病Aの硬膜下血腫を反復した症例に活性型及び非活性型の第Ⅸ因子製剤を使用し、ともに止血効果のあることを認めた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



第 因子抑制物質を有する血友病 A の出血に対し,近年,抑制物質作用をバイパスする意味で第 因子濃縮剤が有効であることが認められている。我々は,昨年第 29 回輸血学会で活性型第 因子製剤である FEIBA を使用し,抑制物質の発生した血友病 A 患者の硬膜下血腫を止血救命しえたことを報告した。その後,同一患者が 1 年間に 3 回にわたり硬膜下血腫を反復し,2 回は活性型製剤の Auto-plex により,1 回は非活性型製剤の Proplex を各々使用したので,その臨床経過及び止血効果について報告する。